



Data

監督・脚本: 荒木伸二

出演: 中村倫也/石橋静河/立花恵理/橋野純平/植村宏司/菅野莉央/松浦祐也/草野イニ/川村紗也/柳英里紗/山中聡

■■■ショートコメント■■■

◆映画はアイデア！製作費300万円の『カメラを止めるな！』（17年）が“カメ止め現象”を引き起こしたことを見れば、それがよくわかる。「ハイ、フェロー。」の挨拶から始まり、移り住んだ男女が、町を管理する“チューター”から“デュード（あいつ）”と呼ばれる“人数の町”とは一体ナニ？それを期待して劇場に赴いたが・・・？

新聞紙評では本作の独創性を絶賛するものが多いが、私の目には同じ日に観た『ソワレ』と同じように、せいぜい大学の映画研究会レベル・・・？

◆ジョージ・オーウェルの『1984年』（49年）はディストピア小説として有名だが、それは痛烈に“管理社会”を批判したため。しかして、チラシに「衝撃のディストピア・ミステリー誕生！」の見出しが躍る、本作のディストピア度は？

本作は、冒頭、借金を抱えてドツボにハマってしまった主人公・蒼山（中村倫也）が「ようこそこの町へ」と歓迎されるシーンから始まる。蒼山に割り当てられた部屋は清潔でそれなりに快適そうだが、それなりの労働の義務（？）もあるらしい。読むことを義務付けられた（？）パイブルも、それなりの説得力があるし、自由セックスに近いこの町のシステムは、若い蒼山にはある意味で向いているのかも？しかし、こんな町が一体どこにあるの？

◆私が事前に収集した情報で自分なりに組み立てたイメージでは、本作はかなり重厚な問題提起作。そう思っていたが、スクリーンを見ていると、本作のアイデアとその演出は意外にチャチ。大学の映画研究会なら、また20分程度の短編ならこれで十分だが、“人数の町”とタイトルする長篇問題提起作としてはイマイチ。それほどの構想力は見られない。さらに、『1984年』の向こうを張る問題提起作というレベルには、とてもとても・・・。

◆本作前半、蒼山に対して「人数の町」を案内するのは、水着姿がやけに目立つ緑（立花

恵理)。この緑が子持ちの女だとはとても思えないが、それはともかく、後半からその妹を探すために姉の紅子（石橋静河）が「人数の町」にやってくるところから、本格的な（？）ストーリーが展開していく。そこで見る、アメリカとメキシコを隔てる「トランプの壁」ならぬ、「人数の町」と「一般の町」を隔てる「ネットの壁」は、いかなる役割を？

『大脱走』（63年）でも、『パピヨン』（73年）でも「脱走モノ」は面白いが、本作の脱走劇（？）はいかにもチャチだから、思わず笑ってしまうことに。

2020（令和2）年9月23日記